慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	『中納言兼輔集』私注（二）
Sub Title	
Author	田中, 直(Tanaka, Sunao)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	1987
Jtitle	三田國文 No.7 (1987. 6) ,p.26- 37
JaLC DOI	10.14991/002.19870600-0026
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-19870600-0026

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『中納言兼輔集』私注（二）

田中　直

桜の花のちるをかきあつめて、夜、さぶらひに置かせ給へりけるを見て、枇杷の大臣

15　①②ちる匂ひあだなる物と③いふなればかくてのみこそ見るべかりけれ

【校異】○該歌ナシ（Ⅲ）　○詞書―桜の花のちるをかきあつめて下さぶらひにをかせ給へりけるをみてひはのおとゝ（類）―さくらの花のちれるかみかはみつにいりけれはひはのおとゝ（枇杷左大臣仲平）（Ⅱ）―殿上にちりたる花をおこせたまへるを見てひはのおとゝ（Ⅳ）　①「秋風」ノ集付アリ（Ⅱ）　②ちる匂ひ―散花を（類）―ちるにわひ（Ⅱ）―はるにほひ（Ⅳ）　③いふなれは―いふめれと（Ⅳ）

【他文献】『続後拾遺和歌集』巻二・春下　三三（みかは水に花のちりつもりけるをみてよみ侍りける／枇杷左大臣／初句「ちる花を」）『秋風和歌集』巻二・春下　一〇四（みかはみつにはなのちりつもりたるをみてよみはへりける／枇杷の左大臣／初句「ちるはなを」）

【口訳】桜の花が散ったのをかきあつめて、夜、（主上が）下侍の間にお置かせなさったのを見て、枇杷左大臣仲平殿（がお詠みになった歌）／すぐに散ってしまう桜の花の色美しさを、不実な物、はかないものと（世の人は）言うのですから、ならば、いつもこのようにして見るに限るものであったことです。

【語釈】○夜、さぶらひに（類）に「下さぶらひに」とする如く、誤写の可能性も否定できないが、底本に従い右のように解した。47にも「よさぶらひにてをみなへしみに野へにいてむとさたむるに八月なり」とあり、この箇所については（類）にも異同ない。「さぶらひ」は、下侍。清涼殿殿上の間の、小庭を隔てた南の棟の北側に位置し、殿上人達の控えの間として、遊宴の催されることもしばしばであった。

○置かせ給へりける　主語は醍醐天皇。散った花びらを見て、宿直中の侍臣がどのような反応を示すかをうかがい、詠歌を促したのである。

○枇杷の大臣　藤原仲平。（→5【語釈】参照）

○あだなる物　「あだ（徒）」は、うわついて誠意のないさま、また、はかなく一時的なさまを言う。「あだなりと名にこそ立てれ桜。花年にまれなる人も待ちけれ」（古今集・春上　六二、読人不和）、「東

宮雅院にて桜の花の御溝水に散りて流れけるを見てよめる／枝よりもあだに散りにし花なれば落ちても水の泡とこそなれ」（同・春下八一、菅野高世）等、その散りやすさゆえに、桜は「あだなる物」の代表格とされる花であった。

そのついでに

16　ひろひ置[き]て見る人しあれば桜花ちりてののちのくやしさもなし

【校異】○詞書―［春部・桜］たいこのおほんときさくらのはなのちりたるをかきあつめて殿上におかせたまへるをみて（Ⅲ）①みる人しあれは―みる人あらは（Ⅲ）②くやしさもなし―くやしけもなし（Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ）

【口訳】散った花びらを拾っておいては、こうやって眺める方もいらっしゃるのですから、桜花とて、散った後それを悔やむ心もなく、さぞ満足していることでありましょう。

【余説】15の仲平詠に兼輔が唱和した。「ひろひ置きて見る人」は天皇。散った花びらにまで執着を示す天皇の風流心を讃えた。15につき、（Ⅱ）の詞書は宮中の御溝水に浮かぶ花びらを見ての詠とし、『秋風』『続後拾遺』の両集もそれを受けるが、併置された当該歌とは内容的に矛盾する。底本の詞書を信ずるべきであろう。

17　桜の花のちるを見る人

雪のごとちりくる春の桜花冬はのこれる心地こそすれ　＊

＊底本「冬。」

【校異】○詞書―さくらの花ちるを見て（Ⅱ）―［春部・桜］一首前（底本16）ノ詞書ガ掛カルカ（Ⅲ）―さくらのはなのちるをみて（Ⅳ）①雪のこと―雪とのみ（Ⅳ）②冬は―はるは（Ⅱ）―冬の（Ⅳ）

【口訳】雪のように舞い散ってくる春の桜花を見ていると、あたかも冬はいまだ去らず、ここにとどまっているかのように思えてくることです。

【余説】「桜の花のちるを見る人」からの贈歌であろうが、作者不明。あるいは屏風の画題を記したものかとも疑われる詞書の書きぶりでもある。ただし、（Ⅱ）（Ⅳ）の詞書では兼輔詠となり、次の18との贈答関係は逆転する。落花を雪と見立てた。

返し

18　桜花白髪にまじる老人の宿には春ぞ雪もたえせぬ

【校異】○該歌ナシ（Ⅲ）○詞書―一首前（底本17）ノ詞書ガ掛カル（Ⅳ）①ましる―まとふ（Ⅱ）②春そ―はるの（Ⅱ・Ⅳ）③雪もたえせぬ―ゆきやたえせし（Ⅱ）―ゆきもたえせす（Ⅳ）

【他文献】『万代和歌集』巻二・春下 三五（題知らず／中納言兼輔）

【口訳】舞い散る桜花が白髪にまぎれてしまう、そんなわたくしのような老人の家では、春とはいえ雪もたえることなく降りつづいているのですよ。

【余説】兼輔の返歌。贈歌が花と雪との見立てにのみ依りかかっ

た平懐な詠であるのに比して、そこに白髪を点じ、老いを歎じたこの返しぶりはなかなかに達者である。雪と白髪との見立ては、

路遇白頭翁。白頭如雪面猶紅。（菅家文章・三「路遇白頭翁」）

百歳有涯頭上雪。（千載佳句・上・杜荀鶴「贈閑上人」）

といった漢詩が先鞭を付け、『古今集』にも、

春の日の光にあたる我なれどかしらの雪となるぞわびしき
（春上 八、文屋康秀）

うばたまのわが黒髪やかはるらむ鏡の影にふれる白雪
（物名 四六〇、紀貫之）

の例がある。兼輔にはまた、

雪のあした、老いを歎きて　貫之

ふりそめて友まつ雪はむばたまのわが黒髪のかはるなりけり

返し　兼輔朝臣

黒髪の色ふりかぶる白雪のまちいづる友はうとくぞありける

又　貫之

黒髪と雪とのなかのうきみればともかがみをもつらしとぞ思う

返し　兼輔朝臣

年ごとにしらがのかずをますかがみ見るにぞ雪の友はしりける
（後撰集・冬 四七〜四七四、底本には見えず）

という貫之との贈答も存するが、当該歌の場合、〈花―白髪―雪〉と見立てを重層化して返したところに巧みさがあるだろう。

19　庭にたゝずみて、八重山吹のもとにて

①わがきたるひとへ衣は山吹の八重の色にもおとらざりけり

【校異】 ○詞書―にはにたゝすみけるにやへ山吹の花のもとにて（Ⅱ）―［春部・款冬］前栽にやまふきはへりけるところにて（Ⅲ）―山ふきのはなのさきたる所にゆきて（Ⅳ） ①「撰」ノ集付アリ（Ⅳ）

【他文献】 『後撰和歌集』巻三・春下 一八（前栽にやまふきある所にて／中納言兼輔）

【口訳】 わたくしの着ております単衣、それは一重ではありますが、この庭に咲く山吹の花、また、八重の山吹襲の色にだって、見劣りしやしません。（けっしていいかげんな気持ちで来たのではありません。あなたを慕う心のひとえさ・裏なさを、どうかお測りください。）

【語釈】 ○ 庭にたゝずみて 「たたずむ」は、「一つ所を離れずにいる。同じ所を行きつ戻りつする。あたりをさまよう。」（時代別国語大辞典・上代篇）。『類聚名義抄』は、「佇」「徘徊」「寸歩」をそれぞれ「タタズム」と訓ずる。タタ（立）スム（住）、すなわち、立ツという動作が固定化した状態を言うのが原義か。女が鎖し戸を開けるのを庭で待ちつづけ、山吹の枝に付けてこの歌を贈った。来訪した情の切実さを訴えたのである。

○ わがきたるひとへ衣 『八代集抄』は「心は明也」と注するのみだが、『後撰集新抄』が次の如く述べる解が傾聴さるべきである。

一首の意は、かくれたる所なけれど、恋の意などをしたにふくめられたるやうにも聞こゆ。もしは相しりたる女の、調じておくりたる衣などを着て、其女の家に行き給へるをりなど、よまれたるにはあらじか。われは二心なく、ひとへ心にてとひ来つれば、山吹のやへ重なれるにもおとらずといふ意のやうなり。

家集を参照しての注であること、ここで明記されてはいないが、

同書中の他の兼輔歌注によっても確認される。実際恋歌として読む以外にはこの歌の真意は測り難く、『後撰集』の詞書はあまりに不明瞭であるというほかはない。美石の注する如く、「きたる」は「着」「来」の掛詞、さらに「ひとへ衣」にも、恋情の「ひとへ(偏)」さ・一途さが掛けられた表現と見るべきであろう。「ひとへごろも」は、「ひとへぎぬ」とも。単衣。裏地の付かぬ衣で、表着の下に着る。「衣無ㇾ裏曰ㇾ単。単衣。此止閉岐奴」(和名抄)。心の裏なさ・無心さをも響かせるか。

○ 山吹の八重の色にもおとらざりけり　自分の恋情の真摯さは八重山吹の色濃さにも劣らぬと訴えた句だが、八重山吹は襲の色目のひとつでもあるため、「ひとへ衣」の縁語となる。上濃黄、下へゆくほど黄を濃くした襲である。

20 ①くちなしの②色ごのみといふ名は立ててゐでの山吹盛③[り]すぐすな

④これはゐでといふ※御則人に山吹の花を持たせて、いろめける人のおこせたりける返事なりけり

【校異】※底本及び(西)は、「はなたてゝ」。諸本により訂す。※※(西)に「みかはやこと」とするを受け、底本「みかはやこと」。諸本により訂す。○[恋部・被知]「ゐてといふみかはやうとふみもたせておこせたるひとのかへりことに」ノ詞書アリ(Ⅲ)　○「あるしの女のかへしいろなる人にやありけむ」ノ詞書アリ(Ⅳ)　①くちなしの—くれなゐの(Ⅲ)　②色このみといふ—いろこのみ　③[□(二字分空白)□はいふ(Ⅱ)—いろこのみてふ(Ⅳ)　③盛すくすな—盛すく哉(類)—[□□□(三字分空白)□]りすな(Ⅱ)　④左注—是は井手といふみかはやうとに山吹の花をもたせて色めける人のおこせたりける返事也(類)—これはゐてといふみかはやうとに山吹の花をもたせていろめきたる人にやるなるへし(Ⅱ)

【口訳】山吹の梔子色、それではないけれども、口無しの(口の固い、けれども)色好みなお方という評判を立てて、井手の山吹さん、花盛りをあだに過ごさないでね。／これは井手という名の御則人に山吹の花を持たせて歌を送りやったところ、あだっぽい相手の女がよこしてきた返歌だということです。

【語釈】○くちなしの色ごのみ　「くちなし」は、『和名抄』に「梔子　広韻云梔音支。今案医家書等用ニ支子二字一。久知奈之。梔子木実可ㇾ染ニ黄色一者也」と見えるように、その実を古来黄色染料として用いた。梔子色は、山吹色に同じくやや赤みを帯びた黄色。ここでも山吹の花を指して詠まれている。和歌では、

山吹の花色衣主や誰問へどこたへずくちなしにして
(古今集・誹諧歌　一〇三、素性)

耳成の山のくちなし得てしがな思ひの色の下染めにせむ
(同　一〇六、読人不知)

といった古今歌にも示されるとおり、その殆どすべてが「口無し」という名前の興味にひかれるかたちで詠まれており、当該歌においても同様であろうと思われる。兼輔の贈った山吹の梔子色に言寄せた。「口無しの色好み」とは常識に反するようにも思えるが、ここでの「口無し」とは、人知れず思いを忍んでいる恋をいうのではなくて、恋愛遊戯の事実を誰にも知らせぬように沈黙していることを指すものであろう。「ひとへ」な恋心を強調した兼輔の詠に対して、

あなたはそんなふうにおっしゃいますが、いろんな女との恋の噂がわたしの耳にもとどいていますよ、あなたは知られないように黙っているつもりでも、好色者だという評判が立っていますよ、といった程度の意味を含ませた表現であろう。

○ゐでの山吹盛りすぐすな　「ゐで」は、現在の京都府綴喜郡井手町。灌漑用の堰である井提に由来する地名という。木津川の東岸、蛙と山吹の名所として名高い歌枕である。

かはづ鳴く井手の山吹散りにけり花の盛りにあはましものを

（古今集・春下　三云、読人不知）

当該歌の下句もこの古今歌を踏まえたと思われるが、左注によると、兼輔が使いにやった下女の名が「ゐで」であったという。女の家に働く者か、それとも、古歌を踏まえた贈答を行うために自邸からわざわざ連れていったものか不明であるが、山吹の名所の名を持つ女にその花を持たせるところに興を覚えたのであろう。無論左注を信ずれば話だが、女もまた兼輔の意を汲んで返歌した。兼輔に対し「ゐでの山吹」と呼びかけ、花盛りが過ぎ去ってしまうように、浮薄な恋にうつつをぬかしているうちに人生の盛りをあだに過ごしてしまわないように、と揶揄した句であろうか。兼輔の求愛も受け入れられぬ結果に終わったらしい。

○ゐでといふ御厠人　「御厠人」は、宮中もしくは貴人の家で便器の清掃などを担当した下女。前記「井手」の出身であったための名であろうかと想像される。

○いろめける人　「いろめく」は、いろっぽくなる、あだっぽく振舞う意。好色な女として評判の女性だったのだろうか、兼輔への返歌ぶりも男慣れした印象を与える。

21　逢①[ふ]事を今夜(こよひ)〳〵とたのめずはなか(中)〳〵春の夢も見(み)てまし

【校異】○[恋部・被知]ニ部類サレルカ（Ⅲ）　○「ことはなきうた」ノ詞書アリ（Ⅳ）　①「万代」ノ集付アリ（Ⅱ）

【他文献】『続千載和歌集』巻十三・恋三　二三八（山吹を折りて人のおこせたりければ／中納言兼輔）『万代和歌集』巻十・恋二　二〇八六（恋歌のなかに／中納言兼輔）

【口訳】お逢いできるのを、「今夜こそ、今夜こそは」とあてにしていないで、いっそ覚めやすい春の夜の夢でも見ておりましょうかしら。

【語釈】○たのめずは　「ずは」の語法については、宣長が「んよりは」（詞の玉緒）と述べたのを初め諸説があるが、竹岡正夫氏が次の三種類に整理されているのが参考となろう（『古今和歌集全評釈』六三番歌注）。

a「A」の部分が現実の事実で、その事実を「ず」と打消して「は」と付ける場合……仮定の意となる。こんなにAしているのだが、仮にそんなにAしないで、Aしないとしたらその場合には……。

b「A」か又は「Aず」かのいずれかになる可能性のある場合に、作者が仮に「Aず」と想定して、そういうときは、という場合……仮にAしないとしたらその場合には……。

c現実そのものが「Aず」の状態の場合……こんなにAずして、Aずにの意。

当該歌の場合、「A」に相当するのは、作者が逢瀬の機会をなか

なか得られないまま、今夜こそはという希望を捨て切れないでいる状態であり、それを「ず」と打消して、こんなに恋い焦がれていないで、とする。竹岡氏の分類されるaにあたる。「たのめ」は、下二段活用で、（相手が自分を）あてにさせる、の意。あなたがわたしをあてにさせている、そんなふうな状態でおらずに、の意となるが、ここでは意訳した。

○ なか〳〵　「ナカ（中）を重ねた語。古くは、ナカは中央として価値高い所であるよりも、両端ではない中途の所を意味していた結果、ナカナカと重ねると、どっちつかず、中途半端、不充分の意。なまはんかよりもむしろ一方に徹する方がましだと思う気持から、いっそ、むしろ、かえっての意に発展」（岩波古語辞典）のごとく考えると理解を得やすい。この場合、直接的には「見てまし」を修飾するが、同時に、「逢ふ事を今夜（こよひ）〳〵とたの」みにしている現状が、どっちつかずでやきもきしてしまうという焦燥感が表されているのである。

○ 春の夢　はかなく実のない夢幻の世界を表す「春の夢」、また「春の夜の夢」は、新古今時代にとりわけ愛好された歌語であるが、次に三代集時代の用例を列挙する。漢語「春夢」の翻訳語か。

寝られぬをしひてわがぬる春の夜の夢をうつつになすよしもがな　（後撰集・春中　七四、読人不知）

まどろまぬかべにも人を見つるかなまさしからなむ春の夜の夢　（同・恋一　五〇九、駿河）

春の夜の夢のなかにもおもひきやきみなき宿をゆきてみむとは　（同・哀傷　一三六七、忠平）

春の夜の夢はわれこそたのめしか人のうへにてみるがわびしき　（古今和歌六帖・五・いまはかひなし　三三六）

春の夜の夢にあふとしみえつるはおもひたえにし人をまつかな　（伊勢Ⅰ　一一七）

忘られず恋しきものは春の夜の夢の残りをさむるなりけり　（貫之Ⅰ　六三五）

寝られぬをしひてねてみる春の夜の夢の限りはこよひなりけり　（同　六三九）

22　雨ふる日

（庭）にはたづみ①（ここ）木のもとごとに②流（なが）れずはうたかた③人を④あはと見（み）ましや

【校異】○該歌ナシ（Ⅲ）　○詞書―はるさめのふるひにこれるみつに花のちりかゝりたるに（Ⅱ）―一首前（底本21）ノ詞書ガ掛カル（Ⅳ）　①木のもとことに―このもとちかく（Ⅱ）　②なかれすは―なかれなは（Ⅳ）　③人を―花を（類・Ⅱ・Ⅳ）　④あはと―ありと（Ⅱ・Ⅳ）

【他文献】『古今和歌六帖』三・にはたづみ　一七三（にはたづみこのしたがくれながれせばうたかたはなをありと見ましや）　『新千載和歌集』巻二・春下　一三三（春雨のふる日にごれる水に花のちりかゝりたるをみてよめる／中納言兼輔／庭たづみ木の本ちかくながれずはうたかた花をありとみましや）　『夫木和歌抄』巻二十六・雑八・水　一三五三（庭潦／同［読人不知］／庭たづみこのしたがくれながれせばうたかたはなをあわと見ましや）

【口訳】降りしきる雨に、庭木の根もとごとに雨水が溢れ流れて

います。そんなふうにわたしも涙に暮れていないで、ほんの一瞬でいい、あの人を遠く眺めて満足していましょうかねぇ。（いいや、とてもそんな程度ではおれないことでありましょうが……）

【語釈】○にはたづみ　「唐韻云潦音老、和名爾波太豆美　雨水也」（和名抄）、「潦　ニハタツミ　アマ水」（類聚名義抄）とされるが、その語義をより詳細に見ると、およそ次のごとくに分類しうるであろう。

①降雨により地上に溢れる激しい水流。

②降雨によってできた水溜り。

③泡沫。水の泡。

③は、後述するように、平安中期以降この語が「うたかた」と混同された結果生じたらしい誤解であるが、当該歌の解釈に際しても少しく考慮に入れておく必要はある。以下、上代・中古にかけての用語例を具体的に検証してみたい。

a 爾に匍匐ひ進み赴きて、庭中に跪きし時、水潦腰に至りき。（仁徳記）

b み立たしの島を見るとき庭多泉流るる涙とめぞかねつる（万葉集・巻二 一九）

c はなはだも降らぬ雨ゆゑ庭多水いたくな逝きそ人の知るべく（同・巻七 三七〇）

d…直海　川往き渡り…（同・巻十三 三三五）

e…潦　川往き渡り…（同・巻十三 三三九）

f…爾波多豆美　流るる涙　とどめかねつも（同・巻十九 四二〇）

g…庭多豆水　流るる涙　とどめかねつも（同・巻十九 四二四）

以上のように、上代における「にはたづみ」は、すべて激しく流れるという性質において捉えられており、和歌にあっては流ル・逝クを導く枕詞としてほぼ固定化している。また、bfgの三首ではそれが「涙」の比喩として機能していること、当該歌の解釈についても参考となろう。「ニハはニハカ（俄）の語根、タツは夕立のタチと同根。ミは水」（日本古典文学大系『万葉集』・二六番歌頭注）という語構成になる語かといわれるが、先に掲げた『類聚名義抄』の声点記載からは「庭タダ海」といった旧来の語源説も見直さるべきかともいわれる（同書・三七〇番歌補注）。aの『古事記』の例も「庭中」とされていること、また、bcgの用字例からも、この語を庭と関連づける語源観は上代にあって既に一般化していただろうことが充分に推察される。

次に、平安期和歌における用語例を検討する。

h 待てといはばたえてかしこにはたづみせきあへぬまで雨も降らなむ（古今和歌六帖・五・人をとどむ 三〇四）

i にはたづみ岸のみのこるあはなみに斧の柄くたす長雨なりけり（保憲女Ⅰ 一八二）

この二例などは、上代の例におなじく、激しく流れるものと解してよいだろう。

j 世とともに雨降る宿のにはたづみすまぬにかげの見ゆるものかは（拾遺集・雑恋 三三三、読人不知）

k つれづれにながむる宿のにはたづみすまぬに見ゆるかげもありけり（伊尹 一四六）

両首ともに、「すむ（澄）」に「住む」、「かげ（影）」に馬の「鹿毛」を掛けた歌だが、「にはたづみ」の濁った性質に注目したものである。

l世の中はありてむなしきにはたづみおのがゆきゆき別れぬる身を　（古今和歌六帖・三・にはたづみ　一七三〇）

mにはたづみ流るる方のなければや物思ふ人の袖に流るる　（同　一七三二）

nにはたづみ行く方しらぬ物思ひにはかなき泡の消えぬべきかな　（伊尹　一六三）

l・mの二首の六帖歌における「にはたづみ」は、雨水の流れよりも、むしろ雨水のたまってできた水溜りをいうもののようである。それがlでは、地面の傾斜により思い思いの方向に流れてしまい、久しく溜ったままでいないことが世の無常に喩えられる。『三宝絵』の序文が「世は皆堅く不ゝ全る事、水の泡、庭水、外景の如し」と言うのも、同様の属性をいったものであろう。逆に、mでは、溜ったまま流れないことが、物思いのやる方なさに喩えられる。nの伊尹詠も同様の発想によるものであり、これらは単に行ク・流ルにかかる枕詞と見做されるべきではない。

このように平安期における「にはたづみ」は、激流という動態とともに、水溜りという静態における雨水の印象を濃くしてゆく傾向があったようである。そのことを最も端的に示しているのが、

o五月雨のをやむけしきの見えぬかなにはたづみのみ数まさりつつ　（後拾遺集・夏　三九九、叡覚法師）

であり、ここでの「にはたづみ」は、一・二…と数えうるものとして詠まれているのである。

ただし、この歌には異説がある。顕昭『後拾遺抄注』に「ニハタヅミハ水ニウキタルツボノヤウナル物也」（→補注(1)）とあるもので、この注によれば「にはたづみ」は「うたかた（泡沫）」と同義とされるのである。この「にはたづみ」と「うたかた」との同一視は、平安中・後期の歌学書類にも見受けられ、例えば『能因歌枕』は、

にはたつみとは、雨のふるにたまのやうにてあるみつのあはをいふ。又はゝかたやるともいふ。はかなきよにたとふ。

船をは、にはたつみ、うたかたと云。

ねをは、にはたつみ、うたかた、はやたへともいふ。

あめのあはをは、うたかたといふ、にはたつみといふ。

とする。これと逆の理解もあり、『綺語抄』には、

うたかた、あめのたまりてたまりのやうになるをいふ。

とある。両者のこの混淆がいったい何事に原因するものなのか明確にはしがたいが、あるいは、先にも一部を示した十巻本『和名抄』が、

霤（潦等附）説文云霤（和名阿末之太利）屋簷前雨水流也。唐韻云潦（音老、和名爾波太豆美）雨水也。淮南子注云、沫雨（和名、宇太加太）雨潦上沫起若覆盆也。　（前田家本）

と、「潦」「沫雨」を「霤」の項目にまとめて掲出していることにも関連するのであるかも知れない。（二十巻本系の諸本はこの三者を独自項目として別個に載せる。）この誤解の上に立って「にはたづみ」を詠じた例もあり、

p水の面にうきてながるるにはたづみ見るにつけても袖ぞぬれける　（千頴　八〇）

などは、この説に立たないかぎり解釈しえない歌だろう。また、

q思ひいでよぬれこし宿のにはたづみうきかほ見よと我はいはせき　（順Ⅱ　七五、双六盤歌）

も、四句の「うき」が「憂」に「浮」を掛けたものと考えると、やはり水の泡をいう可能性が強い。

雨の降る日、庭の木々の根もとごとに水溜りができ、雨水が濁流となって溢れ流れている。その嘱目の景を、bfgの万葉歌、及びmの六帖歌と同様に、満たされぬ恋に泣き暮れる涙の比喩とした。「冬川の上はこほれるわれなれや下にながれて恋ひわたるらむ」（古今集・恋二 五一、宗岳大頼）といった例に同じく、「流れ」に「泣かれ」を掛けた、と考えるべきであろう。「ずは」については、21の【語釈】参照。

○うたかた　難語として古来多くの説が行われてきた副詞である。『万葉集』には、「うたがたも」の形で、

歌方毛云ひつつもあるか吾ならば地には落ちじ空に消なまし　（巻十二 二八九六）

離れ磯に立てる室の木宇多我多毛久しき時を過ぎにけるかも　（巻一五 三六〇〇）

あまざかる鄙にある吾を宇多我多毛紐解き放けて思ほすらめや　（巻十七 三九四九）

うぐひすの来鳴く山吹宇多賀多毛君が手触れず花散らめやも　（巻十七 三九六八）

という例が見られる。『遊仙窟』（古典保存会本）が、「未必相看死」と訓じ、『類聚名義抄』にも「未必ウタカタモ ウツタヘニモ」とあるのに同じ語と考えられるが、「蓋ト云ヒタラムヤウニ聞ユ」（万葉代匠記）、「皆是はかなき定めなき事に詠めり」（万葉集童蒙抄）、「皆是はかなくあやうく定めなき事などにたとふ、こゝは其定めなき意也」（万葉考）等、諸説紛々としてきた。現行の辞書類においても、「いちずに。真実に。わけもなく。否定辞と呼応することがある」（時代別国語大辞典・上代篇）、「対象の状態が、ひたすらそうであるかのように見えるのに対して否定的な気持を抱く意を表すか。いちずに、全く、などの意の状態副詞ではあるまい。むやみに、らちもなく」（角川古語大辞典）、「一事のみにわきめもふらずひたすら向かってゆく状態だというような認識から、文脈により、ムヤミニ・ソレバッカリ・イチズニ、あるいはそれに客観視する気持が加わって、ラチモナク・ハカナク・ムナシクといった気持が添うこともある」（竹岡正夫『かざし抄新注』）と、必ずしも見解の一致を見ていない語である。

だが、『かざし抄』が、

万葉には、皆「うたかたも」と詠めり。中古以来は「うたかた」とのみ詠みて、かならず水の泡に寄せたり。心も昔には少し変はれるやうに見ゆ。

と指摘するとおり、上代語「うたがたも」と中古語「うたかた」とは、語義としては必ずしも連続的な関係にはなかったようである。平安期和歌における用例は、次のごとくである。

a思ひ川たえず流るる水の泡のうたかた人に逢はで消えめや　（後撰集・恋一 五六、伊勢）

bながめする軒のしづくに袖ぬれてうたかた人をしのばざらめや　（源氏物語・真木柱）

cいつまでと知らぬながめのにはたづみうたかた逢はで我ぞ消ぬべき　（狭衣物語・巻四）

aの伊勢詠につき、『僻案抄』が、「うたかたといふ詞は、真名には寧などつかへる詞のやうに、思よる事かは。さなくては、いか

でかといふよしの詞也」と注して以来、諸家の説様々であるが、三首ともに、やはり『かざし抄』が、

しばらく万葉・遊仙等の詞をさしおきて思へば、少しき事を露塵など言ふに等しく、水の上のうたかたの、浮き出づる間もなく、消え失するやうに、程なき物に寄せて、しばしの間といふ心にや用ひけんとおぼゆ。

と言い、「チトノマモ」と訳するように、泡沫の意の名詞「うたかた」と混淆された結果生じた「泡がすぐ消えるように、時間的にきわめて短いさま。しばらくの間」（角川古語大辞典）という語義によるものと見てよいのではないかと思う。短時間であることの比喩としての名詞「うたかた」には、

落ちたぎつ河瀬になびくうたかたの思はざらめや恋しきことを
（元永本古今和歌集・恋一→補注(2)）

みるめあらば恨みむやはと海人とはばうかびて待たむうたかたのまも
（小町Ⅰ 四）

といった例もあり、この語義での副詞「うたかた」もそのあたりに淵源するのではないかと考える。abcの三首ともに泡沫の意が響かせてあると考えるべきで、したがって、当該の兼輔詠に関しても四句「あはと」に「あわ(泡)」の掛けられている可能性はかなり濃いといわねばなるまい。

『僻案抄』が「うたかたひとゝ六字つゞけてよめりといふ説は、ふかく見わかでしりがほばかりにのべやる謬説也」と批判することき考えが生じてきたのも、副詞としての「うたかた」の語義が早い時期に不明瞭になってしまっていたことの証左であろう（→補注(3)）。『万葉集』の表記からみると「うたがた」と濁音で読むべきであろうが、前掲した『名義抄』では濁点がないことにもより、ここでは清音としておいた。

○ あはと見ましや　［あは］は、「彼は」。遠称の代名詞「あ」に助詞「は」の付いた形で、「あれ・は！」という感嘆の意を表す。「あはと見る」で、遠い場所にあるものを遥かに望み見る意となる。

あはと見る道だにあるを春霞かすめる方のはるかなるかな
（貫之Ⅰ 三七）

あはぢにてあはと雲居に見し月のちかきこよひはところがらかも
（躬恒Ⅰ 三三）

浜千鳥飛びゆくかぎりありければ雲立つ山をあはとこそ見れ
（大和物語・一四五段）

ただし、当該歌の場合、前述のごとく「あわ(泡)」が掛けられている可能性が強い。『万葉集』の「あわゆき(沫雪)」が平安時代「あはゆき(淡雪)」と解されるにいたったごとき転呼音の現象もあり、「は」と「わ」の音の相違は、この時代必ずしも絶対的なものではなかった。

【余説】 詠歌状況がいまひとつ不明瞭なため、確定的な解釈はなしがたい。また、諸本間で本文の揺れが大きく、依処する伝本により、種々の解釈が可能である。ことに、底本及び（西）を除く諸本が四句「花を」としているのに従えば、上句は「涙」の比喩と考える必要のない実景としてよい。

『小町集』及び『小大君集』には、

やり水に、きくの花のうきたりしに

たきの水のこのもとちかくながれずはうたかた花をありとみましや
（小町Ⅰ 六九）

やり水に、さくらのはなかるゝを見て
たきのみつこのもとちかくながれずはうたかたはなをありと見ましや　（小大君Ⅰ一四五）

という歌が見える。後者は前者からの混入かと思われるが、当該歌の異伝とみるべきか。

23　蓑虫つける枝に文をつけておこせたる返しに
春雨の降るにつけつゝ蓑虫のつける枝をば誰か折りつる

【校異】○詞書―みのむしつける枝につけておこせたる返事に（類）―みのむしきたるえたにふみをつけてをこせたるかへりことに（Ⅱ）―［雑部・蓑虫］みのむしつきたるえたにふみつけておこせたるかへりことに（Ⅲ）―あめのふる日みのむしつきたえたにふみをつけておこせたるひとに（Ⅳ）　①つけつゝ―ぬきたる（Ⅱ）―ぬれたる（Ⅲ）

【口訳】春雨の降るのにことよせて、蓑虫がくっついた枝なんかをお折りになったのは、いったいどなたかしら。

【語釈】○蓑虫　『枕草子』に「いとあはれなり」（四〇段）とされる虫だが、和歌の題材としては一般的でなく、『古今和歌六帖』などにもこの題は見えない。平安期歌人になる蓑虫詠を拾いあげてみると、

aもみぢ葉の枝にかゝれるみの虫は時雨ふるともぬれじとや思ふ　（頼基Ⅰ一九）

bみの虫になるをみる〳〵青柳の糸にのみよるわが心かな　（和泉式部Ⅰ五三）

c雨ふらば梅の花笠あるものを柳につけるみの虫のなぞ　（同五四）

dいかでかは露にもぬれむ雨ふれどもえしがいその松のみの虫　（夫木和歌抄・巻二十七・蓑虫　三三四、平祐挙）

eみの虫の宿れる松のもとよりやぬれじと人はたのみそめけむ　（同　三三四、読人不知、dへの返歌）

fみの虫のすがる木の葉も落ちはてゝつく方もなき秋の暮れかな　（同　三三四、源仲正）

といった例が挙げられるが、当該歌はこの虫を詠じた最も早い例としての意義を持つものであろう。「蓑」を「春雨」「降る」の縁語とすること、acdeの例におなじ。

【余説】春雨に言寄せして「蓑」の名を持つ虫を贈るという相手の悪戯っぽい振舞いに応じた。春雨の歌として22に連繋する。

補注

(1)陽明文庫本『後拾遺集』勘注も、この顕昭注を引いて「ニハタツミ水ニウキタル壺ノヤウナルアハナリ」とする。これらはおそらく、『奥儀抄』に「うたかたは水のうへにつぼのやうにてうきたるあわ也」とあるのを敷衍した注であろう。「にはたづみ」と「うたかた」との混同がここにも示されているわけだが、顕昭は『袖中抄』においては、「順和名云、うたかたとは沫雨也。にはたづみとは潦也。かくいひつればにはたづみとは雨のふるに、庭につぼのやうに丸なる物を云ふ。うたかたとも其を云と思ふに、文字のかはりたるぞおぼつかなき。にはたづみ、うたかた別の物にて有べきにや」と疑義を提出している。

(2)清輔本・関戸本では、三句「うたかたも」とする。

(3)「うたかた人、未必人、定めなき人なり」（仙覚抄）とするごとき説で、後世、「うたかた人は息消えて、帰らぬ水の泡とのみ散りはてし」（謡曲・夕顔）といった用例が現れるが、こうした誤解は、平安朝の

かなり早い時期からあったらしく、『海人手古良集』の「あふさかのうたかた人は陸奥のさらに名こそをなづくるかもし」（師氏四）などはこの理解に立ったものであろう。

〔付記〕本稿は、『都立桜水商業高等学校紀要』第十一号（昭六二・二）に掲載したものの続稿である。